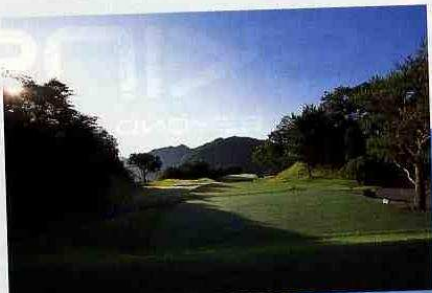


関西学院大学の「自然教育の場」としてゴルフ場が建設された

千刈カンツリー倶楽部

兵庫県三田市山田大道ケ平605
 ☎079・564・2282
 開場日●昭和40年4月17日
 コース●18H/6485Y/P72
 設計●J・E・クレイン



16番/448ヤード/パー4(下)
 距離のあるパー4で、左ドッグレッグ。
 ティショットの飛距離とともに方向性も求められる難易度の高いホール

13番/186ヤード/パー3
 打ち下ろしたか距離があり、
 グリーン周辺は狭くなっている。
 正確なショットだけがグリーンを捉えることができる



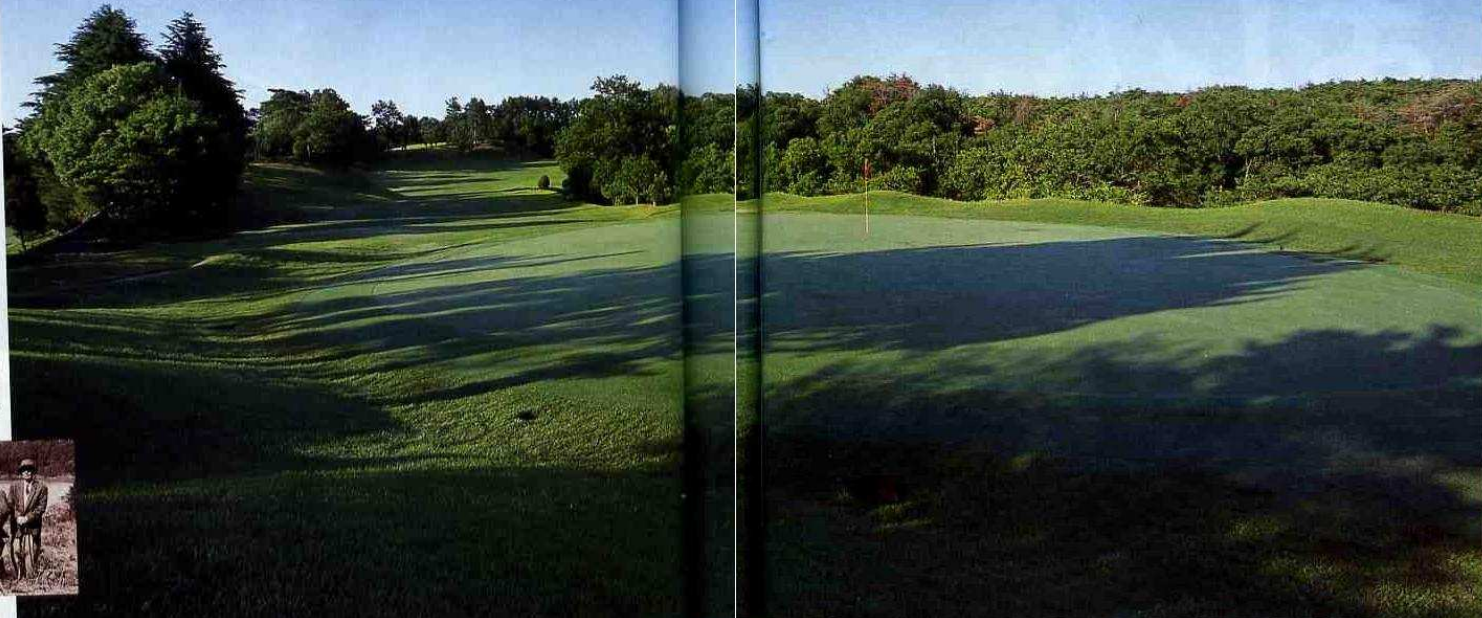
豪快な谷越えになる11番ホール

コース予定地を核分する関西学院大関係者。
 中央黒コートが理事長



文●田野辺 薫 撮影●西本政明

昭和40年7月25日18ホールを本開場。クラブハウス内にチャペル(礼拝堂)のあるミッション系らしいゴルフクラブの登場だった。因みに、ティフロン芝は、やがて毎年春はげ病に悩まされるようになり、昭和61年高麗芝、野芝に張り替え、現在はグリーンはベントの1面である。



開場直後のハウス周辺のホール



開場日の1番ホール。左端が設計者のJ・E・クレイン



「千刈」とは珍しい地名である。調べてみると、羽束台地(現所在地)は、北摂でも古代から開けた土地で、一の坪、五の坪、千束など古代条理制の名残りがあふ。千刈に似る千束は、千束の稲がとれる広さの田地という意味から転じた地名だ。千刈がそれに繋がる。コース近くには千刈水源池がある。

千刈地区は長い間、深い眠りの中にあつたと千刈CC40周年史は書く。眠りを破つたのは栗野頼之祐(関西学院大教授「自然教育の場」として最適)と、学院当局に訴え続け、昭和37年2月買収を完了。9月10日、学校法人とは別に事業会社、羽束台開発(株)を設立。資本金200万円、初代社長・天野利三郎(学院同窓会会長、小宮孝関西学院長以下、学長、中等部長等の名が役員にスラリ。10月17日関西学院千刈カンツリー倶楽部を設立と順調に進む。学校法人がゴルフ場を経営する大義名分は、関西学院は国際的の大学園、国際的な賓客を迎える社交機関としてのゴルフ場が必要、国際人教育に役立つなどだった。

昭和38年11月28日、キリスト教式に牧師司会による起工式を挙行、翌29日ブル工事に入った。コース設計は、天野社長が、鳴尾GC猪名川コース建設で苦勞を共にしたJ・E・クレインに依頼。学院所有地8・6万坪、羽束台開発(株)所有7万坪、計15万6000坪だが、実測20万坪と広がった。

土量移動は18ホールで僅か60万立方メートルと常識の3分の1、平坦な丘陵地だった。千刈CCは、日本初のティフロン芝採用で話題だった。1956年(昭和31年)僅か7年前に米国ティフロン市で開発された新種の芝で、高麗芝の100倍の繁殖力、葉が細くベントに似る。順目逆目がないなどの特徴があり、在日米軍ゴルフ場などに登場していた。特に冬期でもライグラスをオーバーシードすると、青々として待望のエバグリーンが実現できると騒がれていた。米園事情を視察した上で導入に踏み切る。大量の水を必要とするティフロン芝のために全域にスプリンクラーを敷設、またキャディ不足を見越してモノレールカートも導入、いずれも日本初だった。会員募集は、1次、2次は学院関係者が殺到したが、3次でヒタリ止まる。昭和39年関西学院千刈カンツリー倶楽部を千刈カンツリー倶楽部に改称「学院関係者に限り」という入会資格を外し一般入会を認めた。